

報告

親準備期にある青年期男女の対児感情に影響する要因の検討

片岡南実¹⁾ 関屋伸子²⁾ 石岡洋子²⁾ 濱田佳代子²⁾

高知県・高知市病院企業団立高知医療センター¹⁾

高知大学教育研究医療学系看護学部門²⁾

An Examination of Factors Affecting Young Men and Women's Feelings

Toward Children in Parent Preparation

Minami Kataoka¹⁾ Nobuko Sekiya²⁾ Yoko Ishioka²⁾ Kayoko Hamada²⁾

Kochi Health Sciences Center¹⁾

Research and Education Faculty, Medical Sciences Cluster, Nursing Science, Kochi University²⁾

要 旨

目的：本研究は、親準備支援の示唆を得るために、青年期男女の対児感情の実態およびその影響因子を検討することを目的とした。

方法：大学生469名を対象にPBI日本版、花沢の母性理念質問紙及び対児感情評定尺度を用いた無記名自記式調査を実施した。

結果：有効回答であった調査票306部（回収率76.5%、有効回答率85.2%）を分析した。対象者は男性90名（29.4%）、女性216名（70.6%）であった。対児感情は、接近感情が平均 25.6 ± 7.4 点、回避感情が平均 10.7 ± 6.4 点であり、男女で差がなかった。接近感情の影響因子は、男性では「子どもを持つ年齢を考えているか」（ $p < 0.01$ ）と「乳幼児との接触経験」（ $p < 0.05$ ）であり、女性では「母性肯定感情」（ $p < 0.001$ ）であった。

結論：親の準備期間にある青年期の男性は、乳児との接触をより多く経験すること、女性は母親に対する肯定的な感情を促すことが子どもに対する肯定的な態度を高めると示唆された。

キーワード：対児感情、青年期、乳幼児との接触経験、母性肯定感情

Abstract

Purpose: The purpose of this study is to examine the factors that affect young men and women's attitudes toward children in order to offer suggestions which help support parental preparation.

Method: An anonymous self-administered survey using PBI (Parental Bonding Instrument) - Japanese version, Hanazawa's Maternal Philosophy Questionnaire, and Child Feeling Rating Scale was conducted on 469 university students.

Results: We analyzed 306 survey forms that had valid responses (collection rate 76.5%, valid response rate 85.2%). The respondents consisted of 90 men (29.4%) and 216 women (70.6%). Regarding attitudes toward children, the average was 25.6 ± 7.4 points for approach emotions and 10.7 ± 6.4 points for avoidance emotions. There was no significant difference between males and females. Factors that influenced positive attitudes toward children (approaching emotions) for men were “whether they were thinking about what

受付日：2020年6月30日 受理日：2020年10月8日

age to have children” ($p<0.01$) and “prior experience of contact with infants” ($p<0.05$). The significant factor for women was “positive feelings toward motherhood” ($p<0.001$).

Conclusions: It is suggested that young males, who are in the parent preparation period, experience more contact with infants and that females promote a positive affirmation of motherhood to increase positive attitudes toward children.

Keywords: attitudes toward children, young men and women, prior experience of contact with infants, positive feelings toward motherhood

【緒 言】

母性感情とは児に対する感情であるが、これは決して母親だけでなく未婚女性にもあり、また父親などの男性も当然体験する感情である。それ故に母性感情は対児感情ともいわれ¹⁾、子どもに対する愛着、拒否、憎悪などのあらゆる対人的態度を示す²⁾。幼少期の子どもは言語の発達が十分でないため自分の気持ちや思いを言語でうまく表現できない³⁾。そのため、乳幼児とうまく関わるには、児が考えていることを言語以外の表情や仕草から想像するコミュニケーション力が重要であり、それは母性の発達にもつながると考える。青年期は近い将来に親となろうとしている年齢段階にあり、親準備性を獲得する重要な時期である⁴⁾。そのため、高いコミュニケーション力は、親として児と適切に関わる上で必要なことである。しかし、対児感情の影響因子としてコミュニケーション力を含めて調査した研究は見当たらない。さらに、青年の対児感情を高めるための示唆を得るには、青年期の対児感情について研究することが必要であるが青年期の対児感情を明らかにした研究はあまり見られない。

そこで本研究では、青年期男女の対児感情の実態およびその影響因子を検討し、親準備支援の示唆を得ることを目的とする。

【方 法】

1. 用語の定義

- ・母性能力：ライフプラン、コミュニケーション力、乳幼児との接触経験、被養育体験、母性意識（女性のみ）からなる、母性のもととなる意識や行動。
- ・対児感情：乳児に対する感情と定義し、肯定的感情である「接近感情得点」と否定的感情である「回避感情得点」の2種類の得点を求められる。
- ・ライフプラン：子どもを持つこと、親になることに関する将来の計画。
- ・乳幼児との接触経験：0～6歳の児との触れ合い経験。
- ・被養育体験：16歳までの、両親のさまざまな態度や行動と定義し、愛着、暖かさ、共感、親密さなどの「養護」項目と、操縦、侵入、過剰接触、幼児扱い、自立的行動の妨害などの「過保護」項目の2種類の得点を求められる。
- ・母性意識：女性が母親になる、あるいは母親であることの自覚とその自覚に基づく妊娠・分娩・育児への態度や価値観との両者を包括する概念。

2. 研究方法

1) 研究デザイン

量的相関関係的研究

2) 研究対象

4年制大学の男子学生及び女子学生

3) 調査期間

2019年6月13日～2019年7月9日

4) 調査方法

対象者に調査目的および内容、倫理的配慮を説明し、研究の説明文書と無記名自記式質問紙調査票を配布した。調査票の回収は留置き法とした。

5) 調査内容

- (1) 属性：学部・学年、性別、年齢、きょうだい（数、弟または妹の有無・年齢差）
- (2) ライフプラン：育児希望・数・性別、子どもを持つ年齢を考えているか
- (3) 対児感情：花沢¹⁾の「対児感情評定尺度」(表1)を用いた。接近・回避項目各14項目からなっており、「そんなことはない」～「非常にそのとおり」の順に0～3点を与えて得点化した。rangeはそれぞれ0～42点である。

- (4) コミュニケーション力：一宮⁵⁾の「大学生を対象とした対人コミュニケーション尺度」を用いた。「傷つきの恐れ・同調と対立回避」「親しい人との関係」「知らない人との関係・働きかけ」「人付き合いへの消極性」の4因子36項目からなる。各項目に対して「はい」または「いいえ」で回答し、「はい」と答えた項目に重みづけ点数を与えて得点化した。rangeはそれぞれ-1～13点、-3～9点、-6～7点、0～13点である。

- (5) 乳幼児との接触経験：一緒に遊ぶ等12項目からなり、「全くしたことがない」～「3回以上したことがある」の3段階から選択し、rangeは12～36点である。

- (6) 被養育体験：小川⁶⁾の「PBI日本版」を用いた。12の養護項目と13の過保護項目で、各項目に「そんなことはない」～「非

表1 対児感情評定尺度 (花沢成一, 母性心理質問紙第2部)

現在あなたは、赤ちゃんについて、どのようなイメージを持っておられるでしょうか。この評定表は、乳児に対する感情の一般的様相を知るために行うものです。下にある説明を読んで、ありのままにお答えください。

〔仕方の説明〕

あなたは“赤ちゃん”を頭に思い浮かべた時に、どのような感じがしますか。

下の言葉でみた時に、どの段階に当てはまるでしょうか。

あなたの気持ちに合うところに○をつけてください。

あまり深く考えないで、直感的に判断してください。

	非 常 に お り	そ の と お り	少 し の と お り	そ ん と な は な い		非 常 に お り	そ の と お り	少 し の と お り	そ ん と な は な い
あたたかい	...				あかるい	...			
よわよわしい	...				なれなれしい	...			
うれしい	...				あまい	...			
はずかしい	...				めんどくさい	...			
すがすがしい	...				たのしい	...			
くるしい	...				こわい	...			
いじらしい	...				みずみずしい	...			
やかましい	...				わずらわしい	...			
しろい	...				やさしい	...			
あつかましい	...				うっとりしい	...			
ほほえましい	...				うつくしい	...			
むずかしい	...				じれったい	...			
ういういしい	...				すばらしい	...			
てれくさい	...				うらめしい	...			

常にそのとおり」の4段階で得点化した。
rangeはそれぞれ0～36点、0～39点である。

(7) 母性意識：花沢¹⁾の「母性理念質問紙」を用いた。18の肯定項目と9の否定項目で、「非常にちがう」～「非常にそう思う」の順に-2～2点を与えて得点化した。rangeはそれぞれ-36～36点、-18～18点である。女性のみ回答を依頼した。

なお、尺度については作成者の使用許諾を得た。

6) 分析方法

基礎情報は記述統計、対児感情と属性やライフプランとの関連はt検定、対児感情の影響因子は重回帰分析を行った。なお重回帰分析ではVIF値を算出し多重共線性について確認を行った。統計的解析には、統計解析ソフトIBM SPSS Statistics24を使用し、有意水準は5%未満とした。

7) 倫理的配慮

研究対象者には、研究趣旨と研究の任意性、調査用紙は無記名で個人が特定できないこと、無回答の場合でも不利益は生じないことを記載した文書を渡し、研究結果は個人が特定できないようまとめて論文や学会で公表することを説明し、同意を得た。調査用紙は高知大学医学部看護学科において施錠できる保管庫で適切に保管、管理を行った。本研究は、高知大学医学部倫理委員会の承認（承認番号：31-8）を得て実施した。

8) 信頼性・妥当性の確保

(1) 対児感情評定尺度：信頼性 α 係数は、再検査法で接近項目・回避項目とも $r=0.85$ であり、「あなたは赤ちゃんが好きですか」という質問との相関係数が、接近項目では $r=0.76$ 、回避項目では $r=0.68$ と高い正の相関である。

(2) 大学生を対象とした対人コミュニケーション尺度：各因子のANOVA-ICCは、

それぞれ0.83、0.61、0.85、0.84であり、アイゼンク性格検査・改訂版の回答との相関をみたところ、それぞれの因子が異なった関連の強さとパターンを有している。

(3) PBI日本版：信頼性 α 係数は、母親の養護項目 $r=0.92$ 、母親の過保護項目 $r=0.86$ 、父親の養護項目 $r=0.90$ 、父親の過保護項目 $r=0.83$ であり、妥当性においても原本の結果と同様である。

(4) 母性理念質問紙：信頼性 α 係数は、再検査法で肯定項目 $r=0.75$ 、否定項目 $r=0.71$ であり内的整合性はほぼ満たされている。妥当性については、この種の質問紙に妥当性の検証を求めることは困難であるが、少なくとも信頼性の高いものであると作成者¹⁾が述べている。

【結 果】

1. 対象者の特徴

469名に配布し、回答は359名から得て（回答率76.5%）、有効回答は306名（有効回答率85.2%）であった。

1) 属性（表2）

学年は「1年生」が145名（47.4%）と最も多く、年齢（平均値）は19.2歳であった。きょうだいの有無は「いる」が278名（90.8%）であり、対象者の9割にきょうだいがいた。

2) 対児感情

平均値は接近感情 25.6 ± 7.4 点、回避感情 10.7 ± 6.4 点であり、最も得点が高かった項目は接近感情では「ほほえましい」 2.7 ± 0.5 点、回避感情では「よわよわしい」 2.1 ± 0.9 点であった。男女別の対児感情得点をt検定にて比較したところ有意な差は認めなかった。

3) 母性能力

(1) ライフプラン

挙児希望の有無の問いに「少し～非常

表2 対象者の属性 n=306

項目		n(%)	平均値±SD[range]
学部	教育	17(5.6)	
	理	47(15.4)	
	人文	65(21.2)	
	医	144(47.1)	
	農	19(6.2)	
	その他	14(4.6)	
学年	1年生	145(47.4)	
	2年生	80(26.1)	
	3年生	78(25.5)	
	4年生	3(1.0)	
性別	男性	90(29.4)	
	女性	216(70.6)	
年齢			19.2±1.1歳[18-23]
きょうだいの有無	いる	278(90.8)	
	いない	28(9.2)	
きょうだい数			2.3±1.1人[0-8]
弟または妹の有無	いる	158(56.9)	
	いない	119(42.8)	
	無回答	1(0.3)	
弟または妹の年齢差	0～4歳	104(65.8)	
	5～9歳	36(22.8)	
	10歳以上	18(11.4)	

にそのとおり」と答えた者が276名(90.2%)、希望子ども数は「1人以上」が205名(74.3%)、希望する子どもの性別は「男の子も女の子も」が143名(51.8%)と最も多かった。また、子どもを持つ年齢を「考えている」が151名(54.7%)と半数以上であった(表3)。

(2) コミュニケーション力

平均値は、因子1「傷つきの恐れ・同調と対立回避」 5.4 ± 3.6 点、因子2「親しい人との円満な関係」 6.9 ± 2.1 点、因子3「知らない人との関係・働きかけ」 0.6 ± 3.3 点、因子4「人付き合いへの消極性」 3.7 ± 3.2 点であった。

表3 ライフプラン n=306

項目		n(%)
育児希望がある	そんなことはない	30(9.8)
	少し～非常にそのとおり	276(90.2)
子どもの数	考えていない	56(20.3)
	1人	15(5.4)
	1人以上	205(74.3)
子どもの性別	考えていない	104(37.7)
	男の子	9(3.3)
	女の子	13(4.7)
	男の子も女の子も	143(51.8)
	無回答	7(2.5)
子どもを持つ年齢を 考えているか	考えていない	121(43.8)
	考えている	151(54.7)
	無回答	4(1.5)

(3) 乳幼児との接触経験

あやす経験（「一緒に遊ぶ」「おしゃべりする」「手を握る」「あやす」「抱っこする」「おんぶする」「頬ずりする」）は「頬ずりする」以外のすべての項目で「3回以上」経験のある者が一番多かった。一方、世話の経験（「お風呂に入れる」「おむつ交換」「ミルクや食事の世話」「洋服を着せ替える」「添い寝」）はすべての項目で「全くしたことがない」者が一番多かった。

(4) 被養育体験

平均値は、「養護」 28.6 ± 6.01 点、「過保護」 8.8 ± 5.49 点であり、養護が高く過保護が低い集団であった。

(5) 母性意識

平均値は、母性肯定感情が 3.9 ± 9.3 点、母性否定感情が -2.1 ± 4.0 点であった。

2. 対児感情と属性、ライフプランの相関

1) 属性

対児感情と属性（学部・学年、性別、年齢、きょうだい）との相関を検討した結果、有意な相関を認めなかった。

2) ライフプラン

ライフプラン（挙児希望・数・性別、子どもを持つ年齢を考えているか）による対児感情の平均値の差を t 検定で検討した。なお、「子どもの数」「子どもの性別」「子どもを持つ年齢を考えているか」は挙児希望が「少し～非常にある」と答えた者を分析対象とした。また「挙児希望」は「考えていない」と「少し～非常にある」で2群に分けた。その結果、「接近感情」と「挙児希望」($p=0.002$)で有意な関連がみられた。さらに「接近感情」と「子どもを持つ年齢を考えているか」($p=0.002$)で有意な関連があり、挙児希望がある者、子どもを持つ年齢を考えている者の方が、接近感情が高かった。回避感情との関連はなかった。

3. 対児感情に影響する要因の重回帰分析

対児感情との関連要因を検討するため、「接近感情」を従属変数とし、「ライフプラン（挙児希望、子どもを持つ年齢を考えているか）」、「コミュニケーション力（因子1、因子2、因子3、因子4）」、「被養育体験（養護、過保護）」、「乳幼児との接触経験」、「母性意識（母性肯定感情、母性否定感情）」を独立変数として男女別にそれぞれ重回帰分析をした（表4）。その結果、男性の接近感情は、「子どもを持つ年齢を考えているか」($\beta=0.370$, $p=0.003$)、「乳幼児との接触経験」($\beta=0.294$, $p=0.014$)とで有意な関係があった ($R^2=0.264$)。一方、女性の接近感情は「母性肯定感情」($\beta=0.402$, $p<0.001$)とで有意な関連があった ($R^2=0.230$)。コミュニケーション力、被養育体験はいずれにおいても有意な関係はなかった。

【考 察】

1. 属性と対児感情の関係

本研究では、対児感情と学部・学年、性別、年齢、きょうだいなどの属性はいずれも有意な相関を認めなかった。対象者の平均年齢は 19.2 ± 1.1 歳であり、男性90名(29.4%)、女性216名(70.6%)と女性が過半数を占めた。本研究の対象者の所属学部は、医学部144名(47.1%)が最も多く、次いで人文学部65名(21.2%)、理学部47名(15.4%)、教育学部17名(5.6%)などであった。先行研究⁷⁾では、思春期男女の対児感情に影響をもたらす要因として、性別および年齢による傾向を示した。一方、本研究は対象者が大学生であり、青年期後期の発達段階として「親密性」を獲得しつつあることが、対児感情に影響したと考えられた。また、対象者の所属学部は偏りがあり、教育学部や医学部などは子どもの成長発達や接し方に関わる学習をしていることが対児感情に影響すると考えられた。

表4 接近感情に影響すると考えられる要因の関係

	項目	β 値
男性 (n=68)	育児希望	0.096
	子どもを持つ年齢を考えているか	0.37 **
	因子1「傷つきの恐れ・同調と対立回避」	0.214
	因子2「親しい人との円満な関係」	0.012
	因子3「知らない人との関係・働きかけ」	0.066
	因子4「人付き合いへの消極性」	-0.072
	乳幼児との接触経験	0.294 *
	養護	-0.001
	過保護	0.065
		R^2 値
	調整済み R^2 値	0.157
女性 (n=172)	育児希望	-0.058
	子どもを持つ年齢を考えているか	0.046
	因子1「傷つきの恐れ・同調と対立回避」	0.081
	因子2「親しい人との円満な関係」	0.062
	因子3「知らない人との関係・働きかけ」	-0.009
	因子4「人付き合いへの消極性」	0.08
	乳幼児との接触経験	0.12
	養護	0.037
	過保護	0.098
		母性肯定感情
	母性否定感情	0.147
	R^2 値	0.232
	調整済み R^2 値	0.18

重回帰分析 * : $p < 0.05$, ** : $p < 0.01$, *** : $p < 0.001$

2. 男性の対児感情への影響因子

本研究では、男性の接近感情への影響因子は「子どもを持つ年齢を考えているか」と「乳幼児との接触経験」であった。

まず「乳幼児との接触経験」については、乳幼児と遊んだり世話をするという関わりの中での、癒しや温かさの実感、触れ合い方の理解、児に対する抵抗感の低下が接近感情の要因として考えられる。乳幼児との接触経験が多いと接近感情が高いという結果は、先行研究と一致していた^{1) 7) 8)}。中川らの研究では、実験参加者が乳児を抱き上げタカイタカイをすると、乳児は笑顔になり、実験参加者も乳児の様子をみて笑顔になりタカイタカイを繰り返すというように、あやす側と児との間で相互作用が起こっていた⁹⁾。そのような経験が児を想起する際に肯定的感情

とつながるのではないかと考える。また、女子大学生を対象とした研究では、乳児と接触経験をもっていると多様なあやし行動を身につけているとの報告から⁹⁾、児との接触経験が多いと様々な触れ合い方ができ、児に恐怖や回避的な思いを感じにくくなることが考えられる。高櫻は、親密性は二者間の世界を柔軟に変化・発展させ、＜2人の世界＞という限られた関係内においてかかわりを深める中で、「一緒にいたい」という志向性に基づく一貫した働きかけや、双方が互いを選択し合う「自発性」が見られるようになると述べている¹⁰⁾。以上から、接触経験が多いことで児への親密性が増し、接近感情は高まることが考えられる。

次に「子どもを持つ年齢を考えているか」について、自身が親になることを受容、子ど

もを持つことを自身のこととして捉えられることが接近感情の要因として考えられる。喜多は親になることを受容していないことは接近得点が低くなると明らかにしており⁷⁾、先行研究と同様の結果となった。瀧川らは親性準備性高群のほうが低群よりも乳児の泣き声をポジティブに捉えていることを明らかにし¹¹⁾、児という存在を受容できている青年は親準備性が高いことが推察される。

これらのことから、児と接する経験が多いと児への親密性が増し、親になることを自分のこととして捉えやすくなるため、児との接触経験を増やす取り組みが必要と考える。

3. 女性の対児感情への影響因子

本研究では、女性の接近感情への影響因子は「母性肯定感情」であった。母性肯定感情とは、伝統的な母親役割を肯定する感情である²⁾。母性肯定感情に影響する要因として、母親に対する肯定感情、母親像への良いイメージ、妊娠・出産・育児に対する肯定感情が考えられる。母性意識が対児感情に影響することを研究した文献は見当たらなかった。しかし、母親との体験が母性理念を高めることや会話や抱っこなどの母親に受容された経験を通して生まれる母親への肯定的感情が母性意識を形成、発達させるという報告があり¹²⁾ ¹³⁾、母親との体験を通して形成される母親への肯定感情は、母性意識を高める上で重要な意味を持つと考えられる。さらに母親は、娘が母親像を想像する際に一番身近で参考になる存在であり、母親との思い出は、描く母親像に良い影響をもたらすことが推察される。したがって、母親像の良いイメージは高い母性肯定感情につながるのではないかと考える。また、妊娠・出産・育児は母性意識を急激に発達させる大きな影響因子になることが報告されている²⁾ ¹³⁾。本研究対象の女性は妊娠・育児中ではないものの、青年期の

時点で妊娠・出産・育児へ肯定感情を持つこともまた、母性意識の形成に影響すると考える。

4. 本研究の限界

本研究は一施設での調査であり、青年期を幅広く確保できていないため調査対象者が限定されている可能性がある。また、対象が大学生で、所属学部に大きな偏りがあることがバイアスとなっている。今後は大学生だけでなく専門学生や就労者など様々な背景や環境の青年期を対象に調査することが必要である。

【結 論】

1. 対児感情は、接近感情が平均 25.6 ± 7.4 点、回避感情が平均 10.7 ± 6.4 点であり、男女で差がなかった。
2. 肯定的な対児感情（接近感情）の影響因子は、男性では「子どもを持つ年齢を考えているか」($p < 0.01$)と「乳幼児との接触経験」($p < 0.05$)であり、女性では「母性肯定感情」($p < 0.001$)であった。
3. 親準備期である青年期の男性には乳幼児との接触経験を多くすること、女性には母性肯定感情を促進することが肯定的な対児感情への支援に繋がることが示唆された。

本研究にあたり、快くアンケート調査にご協力くださいました対象者の皆様をはじめ、教育施設教職員の皆様に心より御礼申し上げます。なお、本研究は高知大学大学院総合人間自然科学研究科看護学専攻修士論文の一部をまとめたものです。

本稿に関して開示すべきCOI状態はありません。

【引用文献】

- 1) 花沢成一：母性心理学. 14, 15, 65, 79, 85, 240, 241. 医学書院. 2000.
- 2) 松村恵子：母性意識の構造と発達. 15, 38-43. 真興交易医書出版部. 1999.
- 3) 津島和美 (2017)：看護学生が子どもの思いを理解するための体験学習の検討. 日本看護学会論文集精神看護. 47. 155-158.
- 4) 井上義朗・深谷和子 (1983)：青年の親準備性をめぐって. 周産期医学. 13 (12). 2249-2252.
- 5) 一宮厚・福盛英明・松下智子他 (2013)：大学生を対象とした対人コミュニケーション尺度の開発：信頼性と妥当性. 健康科学. 35. 9-15.
- 6) 小川雅美 (1991)：PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性、妥当性に関する研究. 精神科治療学. 6 (10). 1193-1201.
- 7) 喜多淳子 (2001)：思春期男女の対児感情への影響要因の検討－養護性の指標として－. 日本看護研究学会雑誌. 24 (4). 33-44.
- 8) 猪木省三 (2010)：大学生の育児観及び対児感情に関する研究. 県立広島大学人間文化学部紀要. 5. 37-43.
- 9) 中川愛・松村京子 (2010)：女子大学生における乳児へのあやし行動：乳児との接触経験による違い. 発達心理学研究. 21(2). 192-199.
- 10) 高櫻綾子 (2007)：3歳児における親密性の形成過程についての事例検討. 保育学研究. 45 (1). 23-33.
- 11) 瀧川郁美・中見仁美・桂田恵美子 (2012)：大学生の親性準備性と乳児の泣き声に対する反応. 臨床教育心理学研究. 38. 39-44.
- 12) 杉山智春 (2010)：母性意識および次世代育成意識に影響する要因の検討－父親・母親・祖父母・近隣の人々との体験と保育所での体験－. 母性衛生. 50 (4). 543-551.
- 13) 三瓶まり・前田経子・福井典子 (1999)：母性意識の程度とその形成要因～VAS調査用紙に基づいて～. 鳥取大学医療技術短期大学部紀要. 30. 39-43.